

第5号 熊本市後藤是山記念館だより

淡 成 居

昭和9年6月1日発行の俳誌『かはがらし』に是山が「登山バス」と題してエピソードを載せています。文の冒頭から阿蘇登山バスのバスガールの声が響きます。その声の調子がとても良いので引用しますと、

「北は彼方の外輪の、その中央に突き出たる、遠見ヶ鼻は文豪の、徳富蘇峰先生に、大観望と名付け

大観峰由来記

「徳富蘇峰阿蘇山に登る」

られ、そこに登れば大阿蘇も、一目見ゆると申します」と続きます。その声が終わると今度はバス中にわかに雷のような拍手が起こります。実はこのバスには蘇峰と静子夫人も同乗していて、二人は皆に囲まれにこにことしていたそうです。このエピソードは昭和9年4月30日のことでした。

現在では阿蘇の「大観峰」は、蘇峰が大正11年5月18日に命

名していることははっきりしていますが、調べてみますと昭和4年とあったり、物の本には昭和7年と書いてあったりもします。是山もこのことを心配して、『大観峰碑』の除幕式のあった昭和33年(1958年)5月5日を機に、「大観峰」命名の由来を明らかにしています。蘇峰の著した『煙霞勝遊記(えんかしょうゆうき)』

と感動を語っています。またこの日蘇峰は「大正11年5月17日、徳富蘇峰阿蘇山に登る」という1句を残しています。「蘇峰」という雅号から、本当に阿蘇山に登ったことがあるのか、とひやかす人もあったらしく、「今や蘇峰阿蘇山を知るを得た」との証明の裏書としたそうです。

にそのことが詳しく書かれており、是山はそれを引用しています。命名前日の5月17日は蘇峰ら一行は南郷谷側、垂玉温泉から阿蘇登山を開始し火口まで登り、帰りは阿蘇谷側へと下り内牧の塘下温泉に一泊したとあります。蘇峰は阿蘇登山中に見下ろす風景に「展望の妙は、唯だ透迤(いい)たる裾野を、見下すのみでなく、屏の如く立て回す外輪山をみるのだ」

そして翌18日、いよいよ遠見ヶ鼻に登ります。もちろん是山も同行していますが、熊本師範学校教諭の角田政治ら2、3の人達が遠見ヶ鼻に新名をつけてほしいと強く迫ったそうです。蘇峰は昔から立派な名前があるから今更必要はないと固辞したのですが、それがどうしても聞き入れられず、やむを得ず、『大観峰』ではいかがであらうか、と問い、一同、大賛成！と拍手が起こったそうです。

その日蘇峰らは宮地の蘇門館に宿泊しましたが、翌日は山には「大観峰。為是山詩宗、任戌(みずのえいぬ)五月十九日於宮地蘇門館、蘇峰生」と揮毫された扇子が贈られたそうです。

大正デモクラシーの中の是山(その3) 2つの 文化事業の思い出



39歳の是山

大正時代に入ると熊本にも多くの文化人や芸術家が訪れ、様々な文化事業が行われます。今回は是山がかかわった文化事業から2つを紹介します。

◆島村抱月と松井須磨子の

『復活』熊本公演

島村抱月が率いる劇団「芸術座」の公演が、大正4年(1915年)2月4日から始まります。是山はこの時、島村抱月と女優松井須磨子を福岡まで迎えに行っていました。公演会場は当時練兵町にあった大和座で、ここは2500人収容の歌舞伎専用の劇場でした。まず上演に先立って島村抱月と劇作家・中村吉蔵の文芸講演会が行われ、その後、抱月が翻訳し脚本にしたトルストイの『復活』が松井

須磨子を主役として公演されています。この公演は大盛況を収め、6日の九州日日新聞には、「初日は開幕前に満員となり、昨日も午後5時の開幕に2時頃より木戸は混雑をなしたり」と書かれ、同紙の「大和座劇評」欄には「須磨子が天才であることは誰しも拒むことはできない。ヨシ日本物に不成功であっても天才は天才に違いないのである」とまでほめられています。

島村抱月は明治4年(1871年)島根県の現在の浜田市で生まれ、ロシアの演劇団と共同公演を成功させるなど日本の近代演劇を強く推進していきます。また松井須磨子は明治19年(1886年)の生まれで、新劇女優、また歌手として活躍します。『復活』の

劇中須磨子が歌った「カチューシヤの唄」は熊本でも流行歌になって子供たちまでが歌ったと言います。

しかしこんな華やかな二人ですが、その裏では妻子のあった抱月と須磨子の恋愛関係が演劇の高評価とは別に大きな話題となりました。こんなこともあって上演前に熊本で計画された抱月らの講演会では是山が後援を依頼して回っても10数人中承諾したのは1、2人だったと言います。

そんな二人を是山は熊本公演の



島村抱月が是山に宛てた『復活』熊本公演のお礼状。(大正4年2月11日付け)

ため福岡に迎えに行きました。

是山は、この時の車中の二人の様子を回想し、「(須磨子が疲れ)そのうち寝入ってしまうと(抱月が)自分の羽織を脱いで着せかけるのであった。その時の須磨子の足袋の汚れが、どうしたのかいつまでも印象に残っていて、侘しい思いにさせるのだった。(中略)そうした須磨子にさて会ってみると、ほとんどどこにも人気者らしいところも見えず、その服装なども女優としては質素以上のものであった」と書き残しています。

是山の胸中も二人の姿を見て複雑な思いを抱いたようです。

そしてこの公演が終わって次の公演地、長崎に向かった抱月から是山へお礼の手紙が届きます。その手紙には、「暑いような冷たいような、そして濃淡の対照の強い墨絵のような熊本の影響も、永く忘れまじく候」と書かれており、公演の成功と理解されたい二人の関係の両面を吐露した抱月の言葉がありました。

抱月は、大正7年11月、世界的

に流行したスペイン風邪で亡くなります。そして須磨子はその2か月後に後追い自殺をして亡くなりました。

◆九州日日新聞社社屋で

東台彫塑会展覧会を開催

もう一つの思い出として、大正14年4月に九州日日新聞社の社屋で開催された朝倉文夫の主宰する東台彫塑会展覧会を紹介します。

朝倉文夫というと「東洋のロダン」といわれ、大正、昭和と活躍した近代日本彫塑界の巨匠です。大正10年(1921年)に東京美術学校の教授となり、昭和23年(1948年)には文化勲章を受章しています。現在の大分県豊後大野市朝地町の出身で、是山の3歳年上になり、旧制竹田中学校時代からの親友でした。

朝倉文夫は代表作「墓守」で有名ですが、早稲田大学や国会議事堂にある大隈重信像などを制作した人で、熊本では島崎にある三賢堂の肥後の3賢人の一人加藤清正像を制作し、また、もとは熊本城

内にあつて現在は高橋公園に移設されている谷干城の銅像も制作しています。東京の朝倉文夫のアトリエ兼任居だったところは現在、台東区立朝倉彫塑館となっており、大分県豊後大野市朝地町にも朝倉文夫記念館が設置されています。

東台彫塑会というのは朝倉文夫が主宰する東京美術学校彫刻科の卒業生らで結成された団体で、熊本での彫塑展は是山と文夫との交友関係があつたからこそ実現したものでした。

この展覧会は、大正9年(19

20年)に火事で全焼し、その後同11年に建て替えられ鉄筋コンクリート3階建ての新社屋を使つて開催されています。この時の展示は朝倉文夫の大規模好みの大变凝つた展示方法で貫かれており、『後藤は山遺文 そのころ』には、この時の様子が詳しく書かれています。

「当時の社長は山田珠一氏、会場は火災後新築の社屋、3階の大広間(会議室)を中心にして、2階の編集室、植字室を除く、階上、階下の殆ど全部の大小各室を充てた」とあります。そして「電車通りから社屋の裏に臨時の出入り口を開けて、3階までの土運搬用の梯子を懸け、荷車何十台かの土を毎日運び込んだ」ということです。

その結果、造園師の力も借りて3階大広間には、築山や泉水が造られ、その山裾には10数本の松が植えられベンチまで設置されたそうです。ほかの部屋でも準備は進み、応援に駆け付けた彫刻家や美術学生の手も借りて数十点の作品が展示されました。

この展覧会は驚くように凝つた展示が話題になりましたが、展示された作品の半分以上が裸体像でした。時代は大正時代。いくら芸術作品の展示とは言え、裸体像は彫刻だけでなく絵画においても風俗壊乱だと咎められ、幕をかけたあたりしていた時代です。そういうこともあつて、それが当時の熊本では大きな話題となつて、この展覧会は「新しいというよりも、むしろ一種の驚異であつた」と是山は回想しています。

開会翌日の大正14年4月4日の九州日日新聞を見ると、4月3日、午前9時に華々しく蓋が開き、南九州初の試みであつたことや朝倉文夫が率いる展覧会でもあつたことから、開会早々宮崎や福岡などからも団体客が訪れ、渦を巻く入場だったと盛大に伝えられています。

是山は、大正デモクラシーの時代、様々な文化が活発に花開く中、文化事業を通して演劇や美術文化の振興にも大きく貢献していきま



東台彫塑会展覧会時の記念写真。
中央が朝倉文夫。その左が是山。

後藤是山記念館へ

行こう！

企画展

「大正デモクラシーの中の是山」

を開催しています！

本記念館では令和7年6月20日から、後藤是山の大正時代の活躍に焦点を当てた企画展を開催しています。

是山は明治45年に徳富蘇峰の国民新聞社での記者留学を終え九



州日日新聞社に帰ってきます。是山26歳の時です。時代はすぐに大正へと移り、政治や社会の面だけでなく文化の面でも人々が高揚した大正デモクラシーという時代となります。是山はそんな時代の空気を敏感に感じ取り、若き情熱を燃やします。

今回の企画展では、この大正デモクラシーの時代の中、熊本で起こった郷土史熱に対し、是山が新聞を通じてそのニーズに答えていることとする姿や、自らの短歌や俳句の才を生かし文芸を世に広めていることとする姿を俳人・高濱虚子の来熊エピソードも交え紹介しています。また是山が関わった文化事業の中から、島村抱月、松井須磨子らによるトルストイの『復活』劇熊本公演と朝倉文夫率いる東台彫塑会による熊本初の彫塑展開催を取り上げ、新聞記事、写真、書簡、是山の回想文によって紹介しています。

会期は10月下旬までの予定です。どうぞお気軽にご来館ください。

熊本市記念館探訪

夏目漱石大江旧居 (中央区水前寺公園 21-16)

夏目漱石は熊本時代、6回引っ越しを行っていますが、この大江旧居は3番目の旧居になります。家主は落合東郭(漢詩人、大正天皇の侍従)で、漱石は東郭が東京勤務だった頃、ここを借りていました。この家はもともと大江村(現在の新屋敷1丁目)にあったものです。



漱石13回忌に当たる昭和3年に夏目鏡子夫人が娘婿の松岡譲氏と共に来熊した際、是山が案内して大江にあったこの旧居も訪れています。鏡子夫人は、漱石と暮らした当時のことを思い出し、大江村には水車があって、裏一面が田畑で眺めもとてもよかったと回想しています。また漱石の小説『草枕』の題材となった玉名の小天旅行へ出かけたのもこの旧居からでした。

すぐ近くには洋学校教師館のジェーンズ邸もありますよ。是非一度お出かけください。

(夏目漱石大江旧居 TEL096-385-2266)

第5号

熊本市後藤是山記念館だより
『淡成居』

発行日

令和7年(2025年)7月1日

編集・発行・文責

熊本市後藤是山記念館長 植木英貴
(熊本市文化財課所管)

〒862-0950

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

電話・ファックス

096-382-4061

開館時間

午前9時30分～午後4時30分

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始(12/29~1/3)

入館料

大人 200円

小人 100円

